地域・離島歯科医療実習　レポート

学籍番号：　4314100442　　氏　名：　松田　拓馬

実習先：　口之島　　実習期間：令和元年　６月　７日　～　６月　９日

1.　自然環境

面積：13.33 km^2、周囲：20.38 km の小さな島で、トカラ列島の最北端であり、それゆえ十島村の玄関口と呼ばれたりもする。地図右下の燃岳は今も水蒸気を噴き出す火山である。中央にそびえる前岳山麓に広がる原生林からセランマ温泉辺りにかけて、野生牛（純血種の黒毛和牛）が生息している。他にもタモトユリやアダン、トカラヤギといった動植物も見られる。土地活用としては牧場、水田、畑といった感じで一次産業中心である。北部を北緯 30 度線が通っている。

2.　社会的背景

2015 年のデータで人口 128 名、74 世帯であり、1964 年２月２日に GHQ の覚書によってアメリカ領となり、1952 年 2 月 4 日に本土復帰した。島自体は安山岩質溶岩ドームの集合した火山島であり、有史以降の噴火記録こそ残っていないが最新の水蒸気爆発は 18 世紀以降の可能性が示唆されている。

高齢化率に関しては、残念ながら平成 12 年の国勢調査のデータしか見つからなかったが、65 歳以上が 43.9%、15～64 歳が 42.8%、0～14 歳が 13.3%とされており、年齢不詳者の記載はなかったので高齢化率は 43.9%ということであろう。驚くべき数字である。就業者総数が当時 92 人であり、うち第一次産業、第二次産業、第三次産業従事者がそれぞれ 26.1、29.3、43.5%となっている。

3.　住民の生活

島の方々に職業について尋ねてみたところ、漁業や畜産（牛）が多い様子だった。鹿児島市内にマンションを所有して、本土に上がる時にはそこに滞在する人たちもおられるらしく、それでも生活拠点は島というのは郷土愛なのだろうなとほっこりした。臨時診療所の前には河（コウ）と呼ばれる水場があり、昔から採った魚を放したり体を洗ったりと人が集まる場所だったらしいが、今も変わらず子供達が無邪気に水遊びしており楽しそうだった。

4．医療供給体制

一見して医科の診療所と思われる施設が存在するが、医師や保健師は常駐してはおらず、常駐の看護師 1 人という体制で診療所は運営されている。緊急時には看護師が対応し、島外の担当医師に状況を連絡、現地対応が難しいと判断された場合には鹿児島市立病院ドクターヘリ、県防災ヘリ、鹿屋自衛隊ヘリで市内の病院まで搬送するようである。しかし、天候によってはヘリも飛べないので、やはり本土と同じようには対応できないのが現状である。

実習概要

日　付	内　　容
6/8 8:00 ～12:00 14:00 ～16:00 6/9 8:00 ～9:00	 島の子供達の学校検診 成人の義歯調整 午前中に口腔衛生状態が不良だった子供に対しての PMTC う蝕の見られた子供に対する処置 歯周治療 受診者はなかったので、９時まで待ってから機材を片付けた。

振り返り記録

口之島は人口 128 人余りの島で、半年に一度、歯科診療チームが訪れて各種治療を行っている。島民にはあらかじめ伝えられており、診療日は二日間設けられていたものの、患者は初日に集中して来院し、２日目には受診者はなかった。

やはり離島ということもあって、限られた機材の中で折り合いをつけて応急処置のようなものを施すのだろうと予想していたので、材料の豊富さには驚かされた。滅菌の必要な器具に関してはフェリーで一緒に運んできたこじか号で処理していたが、基本セットは全てディスポーザルな素材で作ってあり、無駄な時間を省くなどの工夫もみられ感心した。

学校検診に関しては、小中学校合わせて 19 人の生徒・児童しかおらず、そのため半年前に診た時の口の中の状況を衛生士が把握していたが、半年で急激にう蝕が増えている子もいたようで、その場合は清掃指導も重要であるが、通常の処置よりももう一歩踏み込んだ処置を検討する必要があることを学んだ。

また例えば、抜歯後の偶発症が起こらないかどうかなど、その場で完結せず経過観察を要する治療は、患者が近々本土に上がる予定がある場合や、そうでなくとも本人が強く希望する場合は行う、ということを学んだ。